

るのである。

これは、当時脚咋と同一支配下にあつた高知県甲浦や、穴喰浦那佐など天然の良港を利用して、本土と絶えず往来し、産業方面はいうまでもなく、文化的にも大きな影響を受けたためと思われる。

しかし、海岸近くにあるため、幾多の災害にみまわれ、街の状況もすつかり変つていった。永正九年の大津浪は、穴喰浦南町（正梶、古目）を一朝にして無残に跡形もなく流失させ、その後の再建で街の中心は、当時北町であつた現在の穴喰浦に移つたといわれている。

この大津浪は、地震のためかどうか、東京大学地震研究所でも研究をつづけている。

二、永正の大津浪の被害と穴喰浦の衰微

穴喰浦は、古くから穴喰川をはさんで、南北両町にわかれ、その中心街は、正梶および古目地域の南町にあつた。

わが国戦国時代の最中、永正九年に大津浪にみまわれた。元来、穴喰浦は三方山にかこまれ、入江の浅い地形で津浪には弱い。ましておよそ五〇〇年前の昔のこと、天災に対して何の防備もない時代である。このため、穴喰浦は壊滅の憂き目にあつた。

当時の古文書によると、この大津浪によって南町は全滅し、このため溺死したものが三七〇〇余人、かろうじて逃げのびて助かつたもの一五〇〇余人、罹災家屋は寺社、侍屋敷、町家合せて一八〇〇余軒であつたと伝えられている。

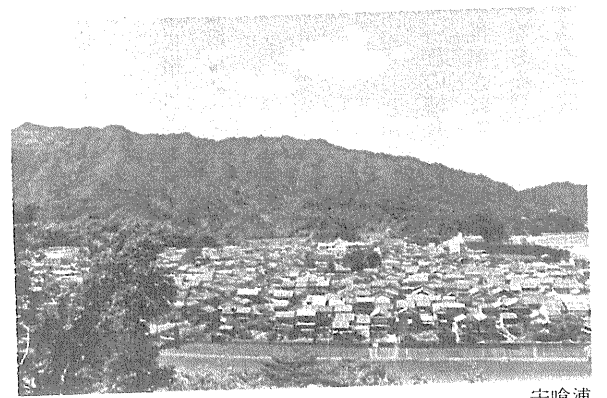
これを見ても、当時穴喰浦の人口は、五二〇〇余人あつたことになる。この外に穴喰浦に属する那佐、竹ヶ島地域

を合わせると、かなり多くの人口を有していたことがわかる。

特に南町はこの災害以前は、戸数一〇〇〇戸以上が軒を列べ、旧愛宕城（角力取山、古愛宕ともいう山にあり）を要として、東の方に繁華な城下町を形成していた。

また、西は中角より馳馬（当時二〇〇戸あつた地域という）へ通じ、元越から旧土佐街道へ、中角から岡の山、正田より大野を経て穴喰の郷分へのびていた。

この大津浪は正梶および古目附近を入江と化した。



穴喰浦